国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（９）

劉　玲

本稿は、中田祝夫編抄物大系（勉強社 1977 年）所収の、国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』（影印本）を底本として使用する。当該抄物の成立、資料的価値については、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（１）」（筑波大学人文社会研究科『筑波日本語研究』第 17 号）を参照されたい。本稿では、前記拙稿、及び「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（２）」（同 18 号）、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（３）」（同 19 号）、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（４）」（同 20 号）、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（５）」（同 21 号）、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（６）」（同 22 号）と国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（７）」（同 23 号）と「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（８）」（同 24 号）に引き続き、主として、抄中に引かれた漢籍及び集成している五山僧の諸家に注目し、それをできる限り明記して、本抄物を解読する際の手がかりになるようつとめる。なお、翻刻・校注上の諸事項については、前記の諸稿に詳しいが、要点また前記の諸稿において説明していない事項について記しておく。

一　翻刻の範囲を底本の二六三頁から二八八頁とする。

一　基本的に、原典テキストが写された方形の枠線の後に置かれている抄文の部分を翻刻の対象とする。若干、その枠線内及び枠線外の周辺に書き込まれた小文字書きの抄文が存在するが、影印本で判読しにくい箇所が多いため、本稿では翻刻しない。

一　漢籍の引用が見られる場合、その書名または篇目名や章・節の名、作者名に ‖ 線で記す。例えば、「村云　トチエモ讀也　才子傳第三　岑參　南陽人　文本之後天宝三年趙岳榜第二人及第……」（二六七１）、「山谷茶詩　煎成車声■羊腸」（二八〇11）、「因作恨別詩云自恨尋芳到已遲　往年曾見未開時……」（二八一１）などあり、また、「停車　後‖鄧禹傳　養按　本傳无注　後‖列第六」（二八〇９）に見る「後」（『後漢書』を指す）や「後列」（『後漢書』列傳）のように書名が略されて

いる場合もある。少数、明らかに漢籍から引かれているが、書名または篇目名や章・節の名、作者名などの情報はいっさい記載していないと見られる場合がある。このような場合について、今回、一々原本で確認するに至っていないが、「瀚堂典蔵数据庫系統」(https://www.hytung.cn/)、「中央研究院漢籍電子文獻瀚典全文検索系統」(http://hanji.sinica.edu.tw/)、『中国基本古籍庫』(黄山書社出版)を検索資料として、これらの資料にほぼ同様な本文が検索できた場合に、引用の最初の部分に‖で記す。例えば、「桃云　我赴関西　故園在東　其相隔者萬里路也　盖羨入京使也……故園今在灞陵西之句同也」(二六七6)のように、「故園……」はこの場合である。また、【 】内において関連の情報を補うことがある。なお、書名などの記し方については、拙稿「『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況」(筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』55号)において検討しており、参照されたい。

一　前記の検索資料と本抄物の引用と比較して、文字や行文の上相違する箇所が見られる。例えば、「往来鞍馬烽塵間十餘歳」(二六七3)についてはについては「瀚堂典蔵数据庫系統」(元辛文房『唐才子傳』巻三)において「十餘載」とあり、「……天街両旁槐木　俗號為槐衙曲江池側多柳……」(二七〇15)については「瀚堂典蔵数据庫系統」(『埤雅』〈叢書集成初編景五雅全書〉巻十四釋木)においてすべて「畔」とあるように、相違が見られる。また、「……具躰人状　呼声遂絶　盖妖草也」(二七〇5)については「瀚堂典蔵数据庫系統」(『隋書』〈同文書局石印本〉志・巻二十三・志第十八・五行下)においては「草妖」とあり、「太平御覧……或説　馬賣得一疋帛……」(二六九8～二七〇1)については「瀚堂典蔵数据庫系統」(『太平御覧』〈四部叢刊本〉巻第八百九十七・獣部九・馬五)においては「馬死賣得」とあるように、語順上の違いや誤脱と見られる箇所もある。なお、これらのうち、誤記や誤植だろうところがありうるが、当時に引かれる漢籍の底本がまだ明からにしていないため、今回特に改めず、底本の通りに翻刻する。

一　幻雲抄に集成している五山僧の諸家の説については、次のように──線で記す。例えば、「故園──桃云　我赴関西　故園在東　其相隔者萬里路也」(二六七6)においては「我赴関西……相隔者萬里路也」は「桃云」(桃源瑞仙の説)である。また、「山行　遠上──補云　慈氏　先讀第二句　而後讀第一句　不可也」(二八〇5)については、「先讀第二句……不可也」は「補云」(横川景三の説)において「慈氏」(義同周信の説)が引かれていると見られるような箇所について、「補云」並び

に「慈氏」の両方に ▬ 線線を引く。少数、「桃云　或抄ノ　意ハ　一二之句　言乱世昏暗……」（二七一９）のように、「或抄」とは何を指すか知りえないが、三体詩の抄物の一つであると判断できるので、▬ 線を引くことにする。なお、「或曰　天子ニ　平安ヲ報ス　忠臣ノナリト　是ハ　京ヲ　故園ト　ミルニ　ヨイソ」（二六九１）とあるように、「或曰」と記されるのは五山僧の説だろうが、誰某の説か直ちに断定しかねないので、あえて ▬ 線を引くことにしない。「或云」や「或説」と記された場合についても同様である。

一　漢字については、底本の形態を重んじ、異体（略体・俗体を含む）の文字をできるかぎりそのまま写し、また、末尾の表１にまとめる。例えば、【參（参）】（二六七１）や【灵（霊）】（二七八５）」など。また、□で示し、【　】内において【「米*凵」（幽）】（二七二３）、【「虍*戈」（戯）】（二七七９）、【「兄+舛」（舞）】（二七三13）、【「木+冖+友」（愛）】（二七一10）・【「言*云+冄」（講）】（二七一７）のように示す場合がある。*符号はその字または偏旁冠脚を左右でまたは内外で組み合わせた文字を、+符号はその字または偏旁冠脚を上下で組み合わせた文字を意味する。これらについて、初出以降はすべて通行体に改め、また、末尾の表２にその通行体をまとめる。その他、「今翻云」（二七〇12）・「扶[二]-佐天子[二]ト」（二七〇19）などのように、工夫しても再現できない場合は通行体のみで記すが、一々説明せず、末尾の表３にまとめる。

一　合字では、「〆」を「シテ」に、「ㄱ」を「コト」に改める。例えば、「草木之生長シテ」（二七一３）、「削（サクコト）」（二七五４）など。

一　踊り字については、底本のままに写す。その際、漢字一つと仮名一つの場合は、底本に従い、それぞれは「々」と「ゝ」で写す。例えば、「云々」（二六七４）、「束帛　々々為疋」（二七〇２）、「シヲタレ　ハテゝソ」（二六七７）など。また、仮名二つ以上の場合または漢字仮名まじり書きで二つ以上の場合は、「〳〵」で写す。例えば、「ヨシ〳〵佳期カアルソ」（二七〇20）、「倍ス〳〵」（二八七19）など。

一　振り仮名はそのまま写す。

一　濁点は少数見え、そのまま写す。

一　返り点、一・二点と上・中・下点は、[レ]、[一]、[上]などのように［　］に入れて記す。

一　転倒符、挿入符、書入れ指示については再現できず、行末の【　】内において説明する。

一　見せ消については■で示し、【　】内において説明することがある。

一　その他

・　頁数は底本のそれに従い、漢数字で記す。また、あらたにアラビア数字で行数を記す。

・　句読点は特につけず、底本の朱点により一文字分をあけることとする。なお、現在通行のテキストと句読点の施し方が異なる場合でも、底本のままにし、特に改めない。その他、破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判明できない場合に、通行のテキストを参考する。

・　破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判読できない場合に、□で示す。推測されるものがあれば、それを□の中に入れる。

・　その他の説明事項があれば、【　】内において記す。

二六三

【題箋頁。内閣文庫蔵書印ある。この頁から『三体詩幻雲抄』第三冊が続く】

二六四

【白紙】

二六五

綱目（略）

二六六

【白紙】

二六七

1　逢入京使　岑參（シン）　村云　トチエモ讀也　才子傳第三

岑參　南陽人　文本（ノ）之後　天宝三年趙岳榜第二人及第

累【この行まで数行間岑參「逢入京使」詩原典テキストが置かれている】【「參」左傍に「サン」】【參（参）】【讀（読）】

2　官左補闕　起居郎　出為嘉州刺史　杜鴻漸表置安西幕府　拜職方郎中　兼侍御史　辭罷　別業在杜陵【辭（辞）】

3　山中　後終于蜀　參累佐戎幕　往来鞍馬烽塵間十餘歳　極征行離別之情　城障塞堡　無不経行　博覧【往（往）】【餘（余）】【博（博）】

4　史籍　尤工綴文　属詞清尚　用心良苦　詩調尤高唐興罕[レ]見此作　云々

5　村云　吐蕃乱（トツハンル）[二]関西（ヲ）[一]ホトニ　使ヲヤリテ和親セラレタカ　今自[レ]吐蕃和ー親　使（ノカ）回ヲ云欤　岑

參為安西　関西節度使判官時　途中逢和親使【「使」字後に挿入符あり、右傍に「乎」。「逢和親使乎」にすべき】
【欸（歟）】
6　故園――桃云　我赴関西　故園在東　其相隔者萬里路也　蓋羨入京使也　故園指京　与故園今在灞陵西之句同【「故園今在灞陵西」は唐王昌齢「別李浦之京」詩に見る句】
7　也　凡為臣者　不忘君　故謂京為故園也　又故園近京欸　言ハ　我ナリハ　シヲタレハテ、■　故園ワ　コイシイホトニ　泣ヨリ【■「テ」某字見せ消】
8　外ノ叟ハナシ　袖ノカワク　マモナイソ　龍鐘竹ハ　竹枝垂地　シタレタルナリヲ　云ソ　言ハ　年ノヨリナル者ノ　ヨロメクニ　譬ソ【叟（事）】
9　補云　岑在関西望杜陵別業也　又随杜■在蜀時作欸幻謂　前義在関西作可欸【■某字見せ消、右傍に「鴻漸」。「杜鴻漸」にすべき】
10　馬上――京ノ　故園　コイシウテ　東ニ　望テイタ処ニ　ヨイ便宜コソ　アレ　幸　京へ上ル人ナレハ　書ヲ　コトツケタ【宜（宜）】
11　ケレトモ　馬上ナレハ　紙筆モ　ナシ　況我心ヲ紙ニ　書スルナラハ　百枚千枚ノ　紙ニモ　不可書尽ホトニ　只傳語【況（況）】

二六八
1　ヲ　スヘキソ
2　報平安　翰墨全書甲集一　胡安定公瑗布衣時　与[レ]孫明復石守道讀[二]書泰山[一]　一-坐十年不[レ]皈得（ルコトニ）　[レ]家問　上有平
3　安字　即投[二]之澗中[一]　不[二]復展讀[一]　又全書第三　温公書儀（ニ）云　凡人得[レ]家書（ヲ）　喜懼相半（ナカハス）　内-外　封[レ]平安字不[レ]可[レ]闕　使尊長見之　則喜云々
4　報平安　有三義　一義言我久奉[二]使於遠國[一]与[二]故國諸親[一]音信不[レ]通也　我生（イキ）タヤラウ　死タヤラウ　知ルマイシケレハ
5　岑參コソ　平安ニテ　無恙ト　傳テ　クレイソ　村菴九淵此義為是【傳（伝）】
6　幻謂　个言万語莫過平安二字　故岑參只以平安傳語于家也　■胡瑗意　亦如此乎【■「故」某字墨消し。「胡瑗意」にすべき】
7　□義　今自吐蕃乞和親ホトニ　天下平安ト　故園ノ人々ニ　ユイ傳ヘヨ　此義モ　ヲトナシヤカ　ナレトモ

故郷ヘノ　傳語ナラハ

8　妻子ニコソ　云イ傳エツラウ　サアレハ　国家ノ安危ヲ　女房トモノ　方ヘ　云イ叟ハ　如何　村云　此義非也

9　□□　一義　言今天子憂天下安危　故云　此使入京則先須向天子報国平安　暗告使者之辞也　若不忠臣　不

10　出此語　是謂京為故國之故也　補云　此義不可也

11　續翠云　馬上――此句　妙至極也　憑（タノム）君――今マテハ　我無為ニ　来ト　天子ニ申シテ　クレイ　知音ニモ　云イタイソ　蓋續翠説含諸義也【續（続）】【翠（翠）】

12　故園　桃抄云　京ヘ　入ル人ニ　送ル詩チヤホトニ我ノ　西ヘ行ニ　故園ハ　東ニアリ　東ノ　方ヲ　望ミヤレハ　路漫々ト　遠ク　隔

13　タリ　路ノ　キハメモ　有マイソ　京ヘ上ル人トキケハ　ナツカシヤ　アラ　コイシノ　京ヤト　云心アリ　此人ノ　行カ　■シキソ　我カ【■「義」某字見せ消、右傍に「羨」。「羨シキソ」にすべき】

14　ナリハ　シヲタレ　ハテヽ　故園ハ　コイシキ　ホトニ　泣ヨリ　外ノ　叟ワナシ　袖ノカワク　マモナイソ　双袖ハ　イツモ　ヌレ　シヲタレテ　竜

15　鐘トシテ　涙ノ　カワクヒマモ　ナシ　此故園モ京ヲ　指ト云　義アリ　故園今在[二]灞陵西[一]之句ト同ト云ソ　天子ノ御座

16　在ルヲ　臣下ハ　故園ト云心ソ　出処分明ナラハ餘論モ　ナイ　詩ノ心モ　面白ソ　又サナクトモ　故郷カ　京ノ方ニ　近キホトニ

17　京ヘ　上ル人ニ　逢テ　故園ノ　コイシキヲ　云コトモ　アラウソ　竜鐘ハ　零落シタルナリ　又龍鐘竹トテ　竹枝ノ　垂[レ]地（ニ）シヲ

18　タレ　タルナリヲ　云ソ　言ハ　年ノヨリナル者ノヨロメクニ　譬タソ　馬上――上ニ　謂ツルヤウニ　故郷ノ　コイシキ　時分ニ

19　京ヘ　行人ニ　逢フホトニ　イヽテ　サラハ　書ヲコト付ケント　思カ　ナニモ　シヨウハ　路次テ　馬上ナルホトニ　紙モ　筆モ　アラハヤ

20　只口（クチ）テ　言付ヲ　マウサウト　岑參ト云者コソ　マダ　ナカラエテ　イキ　无為ニ　アレ　故國ノ　親類トモノ　方エ　エテ　タハシ【无（無）】

21　□也トテモ　我心ヲ　紙ニ　書スルナラハ　百枚ニモ　千枚ニモ　□尽スマシイ　ホトニ　ナカ／＼　紙筆ノ　ナイモ　一物チヤソト　傳語【「□尽」、「尺+日」（書）】

二六九

1 或曰 天子ニ 平安ヲ 報ス 忠臣ノナリト 是ハ京ヲ 故園ト ミルニ ヨイソ 又 龍――ハ 西域ノ二□合スル 音ニテ 竜【□「士+巴」（声）】

2 鐘ハ 癃ノ字ト 成ルホトニ 癃（ツカレ） 憔悴スル心ニモ ナル也

3 雪樵本曰 故園云々 故園蓋指長安也 二句 言岑參為安西節度判官 而東望長安 以垂泪也 或岑在杜鴻漸【節（節）】

4 幕下於蜀之作也 龍鐘取於裴度傳可也 松花蓋云□也 馬上云々二句 逢安西使 寄声於家第也 蓋（シ）【□「人+小」（尓・爾）】

5 因和信使 報我平安 則語有味也 又龍鐘 蘇鶚演義鬖鬖（ランサンタウ）拉-搭（タウ）之類 一云 竹名 人老猶竹枝【「鬖」左傍に「髪乱皃」とある】【「拉」左傍に「クツル」とある】【皃（貌）】

6 葉揺曳不自禁持 又詩粹云 龍鐘 泪垂皃【粹（粋）】

7 和云 彤雲黯々雪漫々 馬蹙銀花路未乾 遥想灞陵桃李後 使君旌旗入長安【「後」右傍「發欠」とある】【「旗」見せ消、右傍に「旆」。「旌旆」にすべき】【發（発）】

8 樵本曰 匹馬云々 太平御覧 八百九十七 風俗通云俗説馬比君子 与人相疋 或曰 馬夜行 目明【この行まで数行間韓翃「送客之上黨」詩原典テキストが置かれている】【黨（党）】

二七〇

1 照前四丈 故曰一疋 或説 馬從横 適得一疋 或説 馬賣得一疋帛 或云 春秋左氏説 諸侯相贈乘【侯（侯）】

2 馬束帛 々々為疋 与馬之相匹耳【「風俗通云……与馬之相匹耳」は「太平御覧」から引かれている】

3 送客之上黨 補云 客何人哉 不書姓名 恐不才人乎

4 人參 隋書五行志 高祖時 上黨有人 宅後毎夜有[二]人呼声 求之不得 去宅一里 但所見人參【但（但）】

5 一本 枝葉峻茂 因掘（ホリ）去其根五尺餘 具躰人状呼声遂絶 蓋妖草也

6 官柳―― 叉文類聚後集二十三 陶侃 鎖[レ]武昌性纖-密 好-問 類[二]趙廣漢[一] 嘗（ヲヽセテ）課[レ]諸営（ニ）種[レ]柳 都-尉夏【「鎖」右傍に「鎮」。「鎮[レ]武昌」にすべきか】【柳（柳）】

7 施盗[レ]官-柳ヲ 植[二]於己カ門[一] 侃後_見 駐種フ 施惶恐謝罪

[レ]車問曰 此是武昌西-門ノ官-柳 何因テ盗_来 此ニ

8 雪本曰 官柳云々 全篇言 清明之後 柳色青々 最可憐之皆也 當此皆 曰日動疾風甚雨 作上黨之【篇（篇）】【皆（時）】

9 □ 豈無労乎 然期以人參五葉斉 故未為労也 蓋人參其葉難斉 々則為竒遇也 故云尓【竒（奇）】

10 又佳-期字は 或曰 客到上黨 必可頒我於參 今用之 為佳期矣 似不穏 然松花之解曰 佳期別之【□「角*半」（解）】

11 欤 蓋有意于醫民也 人參 壽域方 作人信 乾坤生意方 作人言 見于瘧疾与瘰癧部【醫（医）】

12 或云 人參五葉无斉 今翻云 五葉斉 則蓋因有佳期 而人參亦可斉之義

13 樵本曰 戦國策曰 夫柳縦横顛倒植之皆生 使千人植之 一人揺之 則無生柳矣 立賢之道 何以

14 異此 又況植之之人寡 而揺之之人衆乎 松柏醜茂 棄柳醜菀 詩曰 菀彼棄柔 又曰 菀彼柳斯【棄（桑）】

15 是也 又中朝故事云 天街两旁槐木 俗號為槐衙 曲江池側多柳 亦號為柳衙 意謂其【爭（事）】【两（両）】【號（号）】

16 成行列 如排衙也 今言宮腰細瘦 謂之柳腰

17 官柳――淵云 官柳ノ面白処ニテ タニモ 匹馬ノ旅ヘ カナシケニ ■ヤ 風ノツヨク 吹キ 遶テ 暮雨ノ 時分ニ【「匹馬」右傍に書き入れ指示あり、「匹馬ハ 客馬也」とある】【■「呪」某字見せ消、右傍に「況」。「況ヤ」にすべき】

18 銅 鞭ヘワタリ ツカハ 北方ハ 物スサマシカ■ウスソ 題ノ上黨ノ叟ヲ ツヨク 作ル詩也【■「フ」某字見せ消、右傍に「ラ」。「物スサマシカラウスソ」にすべき】

19 佳期 都ノ方ニ 御入アツテ 為[二]大官[一] 立身可[レ]扶[二]-佐天子ト[一] 思ツレトモ 運モ ナウテ 上黨ノ 寒キ 北国ヘワタルカ

20 ヨシ／＼ 佳期カアルソ 人參ハ 人ノ 薬ニナル者也 春山ニテ採[レ]之 助[レ]人ハ 京ニテ 宰相ニモ 為テ □[レ]不[レ]救[二]人民[一]人ヲタスクル【□「ム+虫」（雖）】

21 □□國也 范希文云 不[レ]為[二]良相[一] 可[レ]為[二]良醫[一]之意也 トチシテモ 利[レ]人カ

簡要也　三四句　送[三]人之[二]上黨[二]　[一]ニ

二七一

1　□□之　甚的當也　續翠云　入銅鞮ハ　風雨之入銅鞮也　入字係風雨[一]也　一義　入[二]華清[一]者我入也【「係」「風」間挿入符あり、右傍に「于」。「係于風雨」にすべき】【華（華）】

2　客入[二]銅鞮[一]也　佳期　今非[レ]謂[二]再會[一]　謂[二]客出時[一]也　一ノ句　今出□也　三四句　言採[二]人參[一]　学[二]長生術[一]　可【會（会）】【□「日*寸」（時）】

3　□[二]途中辛苦[一]也　村義同續翠也　斉ハ　人參ノヲエシケルヲ　云也　斉ハ　草木之生長シテ　斉クヲ□ロウヲ　云也

4　補云　回風――寒ロ時節　赴[二]上黨[二]　[一]　故有[二]疾風甚雨[一]也　期客更在[二]人參[一]也　今日縱雖[レ]不[レ]用[二]于世　採[二]人參[一]【□「人+皃」（食）】

5　保[二]其壽　則他年必為公卿[一]乎　人ハ　只壽命カ簡要也　聽雨義云　保[レ]國者　為[レ]天子分憂也　亘[レ]施[二]活[レ]民醫【壽（寿）】

6　[レ]国之術[一]也　言採[二]人參[一]者　意在[レ]醫[レ]国也　補云　聽雨義云可也

7　補□又云　或抄云　知上黨有人才　此義又可乎　仁仲云　一義別離雖悲　別有[レ]所[レ]期　若到[二]上黨[一]　必採[二]【□「言*云+丹」（講）】

8　人參[一]　分[レ]吾乎　一義　春山人參五葉斉時必可[レ]皈也　故云佳期也

9　東漸云　若到[二]上黨[一]　与客相會　似[二]人參五葉斉[一]也　幻謂　非也　桃云　或抄ノ　意ハ　一二之句　言乱世昏暗

10　三四句　言能可救民之死也　盖自□保重之義也　然則指天宝乱乎　韓翃　天宝中進士也【□「木+冖+友」（愛）】

11　□□抄ノ心　今天下　マツ　ク■ヤミニ　民ノ死ヲ可救キ人ハ　御内ソ　御内ヲコソ　憑タレ　上黨ヘ　行シムコソ　ヨイコトヨ【「ロ」字見せ消、右傍に「ラ」。「クラヤミ」にすべき】

12　人參ヲ千採テ　能养生セヨソ　自愛保重ノ心也　カウ看ルハ　天宝ノ乱ヲハシ　云ワウカナリ

13　五葉斉　默云　凡草木　葉之所生　一高一低而不斉人參抽五葉■於一処　故云斉也　■在城中種徳【「■於」、「抽」某字墨消し。「人參抽五葉於一処」にすべき】【「魯」

某字見せ消、右傍に「曽」。「曽在城中」にすべき】

14　菴所見人參如此也　　或曰三椏ハ　三マタニシテ五葉也【「木*亜」（椏）】

15　和云　　憭慓离亭馬独嘶　　関河千里盻銅鞮　前程更有相思処　雲滿滿函関隴樹斉【离（離）】【滿（満）】

二七二

1　病中遣妓　才子傳第四　司空曙　字文明　廣平人也磊落有奇才云々　性耿介（カウガイ）　不[レ]干（カヽハラ）[二]権-要（ニ）[一]に　家無【この頁の頭からこの行まで司空曙「病中遣妓」詩原典テキストが置かれている】

2　□石　晏如也　嘗病中不[レ]給　遣[二]其（ノ）愛姫（ヲ）[一]　亦自流-寓長沙　迁-謫[二]江右[一]　多結（フ）[二]契（ヲ）双林に　暗傷[レ]流-景云々【「双林」左傍に「出家処也」】【□「詹*瓦」】【嘗（嘗）】【迁（遷）】

3　属[レ]詞□-閑　終-萬調-暢　如[二]新花咲[レ][一]日　不[レ]容[二]熏染[一]云々【□【「米*凵」（幽）】】

4　續翠云　今ニ可[二]病死[一]ト云テ　遣[レ]妓也在前目ハ　平家（ニ）□タハカリモナクテ　在目前也　死スルマテモ　一処ニ　可[レ]居ト【「目」右上に顛倒符あり、「在目前ハ」にすべき】【「リ」「モ」間右傍に「テ」某字墨消し。「□タハカリモナクテ」にすべき】【□「門*夕」（聞）】

5　思タレハ　今病ホトニ　餘所へ　ヤル也　傷心字謂二之句也　花ハ　美人也　アラ損也　幾多ノ金ヲ　費シテ　歌舞ヲ

6　人ニ　ナラワシテ　ヲイタレトモ　今ハ　遣[レ]之ホトニ　他人ノ　少年ナルカ　利ニナル也　他人ト　少年トワ　一ツ也　人間不如意如此

7　淵云　傷心二字ハ　此題ニ　簡要也　目前　或云司空目前也　或云　妓目前也　正意ハ　司空目前也　黄金ハ　銭也【淵（淵）】

8　補云　萬事――ワカイ時ハ　カナシイ叟ハ　餘処ニアルト　ミタレハ　年老　則目前ニ　覚タソ　キツカトウツクシイ　妓ニ　對シテ【「補云」右傍に「村云前義同之」とある】

9　アレトモ　用ニ　不立シテ　眠也　万叟皆カナシケレトモ　トリワケテ　一身憔悴――也　少年ハ　他人也非[レ]妓也　教（フシエ）シム　ノ点也

10　對花眠　村云　多病ニシテ　無[レ]遊興[一]ホトニ　花ヲ　欲[レ]見ノ　心モナイソ　然ー間妓女ノ　爵トリモイラヌソ　或花指[レ]妓也　少年指他人也【「或」「花」間に挿入符あり、右傍に「説」。「或説　花指妓也」にすべき】

二七三

1　注　漁隠――補云　勒ハ也惜　不免――家ヲハ　ツクライテハ　カナワヌソ　售[二]妓妾ヲ[一]ハ　家ヲハツクレトモ　又カナワイテ　妓ヲ【「勒」「也」間挿入符あり、「惜」右傍に顛倒符ある。「勒ハ惜也」にすべき】

2　賣ルコトモ　アルソ　幻謂　售　韵會　宥韻　售シウ　承咒切　説文　賣　去手也　引詩賈用不售　又價也　售【韵（韻）】

3　字讎會　或賣ウル妓妾　以[二]其價[一]　償[二]平生未足[一]乎　又售乃償之義乎

4　補云　楽天詩意ハ　年老トモ　主人ハ　仕官シテ不帰シテ　一処ニモイヌソ　楽天句意謂　女已嫁[二]貴人[一]　其人遠去不

5　[レ]皈　只空宅耳　此意非欤　韵會　陽韵　愴字注　凄■　又悽ー愴悲ー惻　又漾韵【■「京」某字見せ消、右傍に「凉」。「凄凉」にすべき】【凉（涼）】

6　漁隠前集廿一　漁隠曰　冨貴於人　造物所[レ]靳自[レ]古以来　多不[レ]在[二]於少年[一]　嘗在[二]於晩景[一]　若少年冨貴者　非【冨（富）】

7　[レ]曰[レ]無[レ]之　盖亦鮮矣　人至晩景得[二]冨貴[一]　未免置[二]第宅[一]　售ウツテ[レ]妓妾以償[二]其ノ平ー生所[レ]不[レ]足[レ]者[一]　如[二]楽天詩云[一]　多少朱

8　門鎖空宅　主人到了不曾帰　司空曙詩云　黄金用尽云々　讀此二詩　使人悽然　誠不必為此也

9　養按　毛韻　尤韻　售　注　漢宣帝毎コトニ[レ]買カウ[レ]餅ヲ　所[二]従テ買カウ[一]家ヘ　輒スヲ_大イニ_讎ウラル　師古曰讎カヲ曰[レ]售ウルト　盖

10 雪 樵本曰 万叟云々二句言 凡人之処世 氣移居々移氣 故得意 則對花益添興 失意則看花却濺泪 今也司空曙【氣（気）】

11 萬叟傷心 故雖花不賞而眠也 蓋指美人也 三四句之意 楽天詩 感故張僕射諸妓詩云 黄金不惜買娥眉

12 揀得如花三四枝 歌□教成心力尽 一朝身去不相随同也【□「旡+舛」（舞）】

13 雪樵本曰 案司空曙傳云 家無□石 晏如也 嘗病中不給 遣其愛姫 亦自流寓長沙 迁謫江右 多結契双【「家無……流景」は二七二2に同様の引用が見える】

14 林中傷流景 寄□上人詩云 柴門客去殘陽在 藥圃虫喧秋雨頻【□「日*柬」】

15 病中――萬事――村云 病中ナル間タ 萬事ニ 就テ 不平ナル也 万事傷[レ]心ナント云事ハ 平生ハヨソノ 事トコソ

16 思ヘ 今ハ 我ハ 病中毎事不平ナル間タ 我身ノ上ニ シラレテ 目前ニ アル 事也 萬事傷心ヲ 愁ニ 辛

17 苦也 多病ナリ スルホトニ 身モ ハヤ クタヒレテ 面白キ 興モ ナケレハ 花アレトモ 見ント思■心モ ナク 對[レ]花【■某字墨消し、右傍に「フ」。「思フ心モ」にすべき】

18 眠テ スコスマテ也 サルホトニ 花ヲ見テ 遊ヒ酒ヲ 飲ミ 宴スルニコソ 妓ナント云 爵トリナントヽ云者ヲ 置テ

19 歌ハセツ 舞ハセツ スレ 今ハ 妓モ 無用ナルホトニ イトマヲ トラセテ ヤルソ サテ／＼ 此妓ヲモ 年ヲサナキヨリ ソタテ

20 立テ 色々 物ヲ 入レテ 物トモ シキセ 歌舞ヲ 教ヘ タテヽ 今イトマヲ トラスルホトニ 只一向物ヲ 入テ シタテヽ

21 時ノ 少年他人 マイラセ アクルワ 無[レ]曲也為[レ]他-人-物ヲ 入レテ マイラセアクル也 又義ハ對花ハ 花ハ 妓ヲ指テ

二七四

1 云ソ □云 一身ハ 病中ナレハ 憔悴シハテヽ妓女ヲ 出サント スルカ 未タ 出シ エスシテ 相對シテ 眠ルソ 對[レ]花トハ【□「木+兆」（桃）】

2 未ダ 此妓女ヲ 我処ニ 置ク叟ヲ 云ソ

3 厳子安和云 老思身後及身前 躰倦眵昏欹枕眠 自是無心歌舞日 従教随処楽芳年【昏（昏）】

4 □□□華清宮 宮中有九寺 即太常寺 司農寺 大理寺 光禄寺 大府寺 大僕 鴻□寺 衛尉寺 宗正寺【この行まで数行間王建「華清宮」詩原典テキストが置かれている】【「僕」「鴻」間に挿入符あり、右傍に「寺」。

「大僕寺」にすべき】【「鴻□寺」、□「月*戸」（臚）】

二七五

1　□□□太宗貞観十八年営建御湯　名湯泉宮　高宗咸亨二年　名温泉宮　明皇天宝六年　改為華清宮

2　雪樵本曰　酒幔云々二句言　置百局於湯所　故処々皆設賣酒楼　雖宮前花柳之間　侭垂酒幔也　蓋横縫曰幕竪縫曰幔也【侭（儘）】

3　内園云々二句言　凡瓜亦有其時　今二月進之　則非天也　故譏之也　案　梁郭祖深姥餉早春瓜　祖深報以疋帛云　非常

4　之理可視也　樵本曰　記云　為天子削（サクコト）［レ］瓜者副（ヨツニサイテ）之巾（オホフニ）以絺（チヲ）為［レ］國-君者華（ナカヨリサイテ）之巾以［レ］□　為大夫累（アラハニス）之　士寔（ホリヲスツ）之【□「糸*メ+左」（綌）】

5　樵本曰　又　續漢書曰　牽牛星　荊美謂之河鼓　主関梁　織女主瓜果【鼓（鼓）】

6　養謂　論語云　不（サレハ）［レ］時不［レ］食　□　江熙云謂生非［二］其時［一］　若［二］冬李梅實［一］也　【「不」左傍に「アラヲハ」とある】【□「疏」字か。左半分が虫食いか）】【實（実）】

7　坡詩　辛苦驪山々下土　阿房纔廢又華清【廢（廃）】

8　酒幔——續翠云　宮ノマワリニ　酒楼ヲ　高ク造ル也　百工鍛冶□匠マテ　居ル也　此句ニテ　玄宗盛叟可見　一百家は　皆酒【「酒幔」右傍に「酒楼縦幔」とある】【□「米+田」（番）】

9　屋也　花柳ノアル処　皆官人家也　内裏ノ中ニ　酒屋ヲ　造テ　官人トモカ　是テ　人ヲ　モテナス也　内——玄宗能奪造化權　況【權（権）】

10　世人也　或云　藏酒之幔　一百家也　又云　引幔飲酒処也　横縫曰幕　竪縫曰幔也【藏（蔵）】

11　□□云　第二句言ハ　難波ノ葦ヲ　初瀬（ハツセノ）楓ヲ移也　内——水暖ホトニ　五六月ノ瓜カ　二月ニ　熟スル也　如此天ヲ　サカサ

12　マニスルホトニ　天下不可久也　酒幔花柳　人カ所致也　不足言焉　村云　二月瓜熟　氣候不正也　言之者無

13　罪［レ］之謂乎　進瓜ハ　始皇ノ瓜モ　温泉ノ叟ナレハ　下ノ心ハ　ソレヲ　用諷唐帝也

14　二月——古註　按唐　慶善　石門　温泉湯□監　々一人　丞二人　掌湯池　官禁　防堰及時粟芻　脩葺【□

「サ寺」（等）】【脩（修）】

15　調度　以準供奉　凡湯所潤瓜蔬　夏時而熟者　以薦陵庶【「凡」「湯」間に挿入符、左傍に「近」。「凡近湯所」にすべき】【庶（廟）】

16　華清宮　此詩　■而興也　外美全盛　内譏奢侈　賦【■某字墨消し、「賦」右傍に顛倒符あり、「賦而興也」にすべき】

17　陶陳題華清宮　殿角鐘殘立宿鴉　朝元帰駕望無涯　香泉宮浸宮前水　未到春時争發花【「陳」右傍に顛倒符ある。「陳陶」にすべき】【「香泉宮」、「宮」字左傍にヒ、右傍に「空」。「香泉空浸宮前水」にすべき】【殘（残）】

18　楽天　長恨歌　春寒賜浴華清池　温泉水滑洗凝脂

19　華清宮　王建カ　是モ　百詞百首ノ　中也　寺前トハ　寺ト　云ヘハ　僧寺ト　ハカリ　心得ルハ　不可也宮中ニ　九寺アルソ

20　太常寺等是也　寺ノ　寮伴寮ノ　如ク也

21　酒幔――捻シテ　唐ニハ　大酒家カ必アルソ　官人トモ　自然ノ時ハ　此ニテ　會スル也　賣酒楼トテ　結構ナル酒屋カ【捻（総）】

二七六

1　多也　サルホトニ　此華清宮ノ　中ニハ　□カナリトモ　酒家ノ　一二百モ　アル也　其ニ　幔幕ヲ　引マワシ　ハル也　宮殿ノ　前ニハ

2　楊柳　ミタレ　官寺ノ　前ニハ　処々ニ　花サキ乱レタル也　トコモ　カシコモ　ソヽメキ　ノヽメク也サテ　内園ノ　中ニハ　温泉宮

3　ト云ソ　湯沐ノ　在処アリ　其湯ノ流レニ　瓜園近キ　ホトニ　瓜モ　アタヽカサニ　早ク　出テキテ　二月中旬ニ　進也

4　ヤラ　竒特ノ瓜ヤ　神異ナル　イカメシイ事トモナリト　上ニハ　云テ　下タ心ハ　是ホト　奢テハ　ナニカ　ヨカラウソ　殊ニ　時ナ

5　ナラヌ　物ヲ　進ル也　二月ノ瓜ト云　叟ハ　未聞叟也　モツケノ叟也　ト諷スル心也　註ニ引秦ノ始皇ノ瓜ノ　叟モ　此驪

6　山テノ　叟也　下タ心ハ　其ノ事ヲモ　用テ　譏諷スル也　已上村義也　養謂　不時不食之謂也文見于前

7　和云　古城陰処両三家　磚道官橋尽野花　日暮行人炊旅店　隔林人賣邵平瓜

8　宣州開元寺　同集八句　杜牧題宣州開元寺水閣　詩季昌増注　釈氏通鑑載玄宗開元二十六年　詔各郡建【この行まで数行間杜牧「宣刕開元寺」詩原典テキストが置かれている】【刕（州）】【閣（閣）】

二七七

1　一寺□年　為□日開元寺　勝覧十五　宣城郡開元寺注載杜牧六朝文物草連空之詩　不録某歳某人建

2　松寺――注沈傳師云々　此集八句　題宣州開元寺水閣詩　六朝文物草連空　天淡雲開今古同云々　増注

3　杜牧嘗為宣州判官　又佐沈傳師宣州幕　幻謂　季昌注与天隠註違　孰是　按才子傳并排韵　不【并（並）】季昌増注開元寺水閣詩開元寺水閣詩

4　載牧赴宣州之事　才子傳云　沈傳師表為江團（タン）練府巡官云々　此時到宣州欤　未審　履歴　杜牧　太和【團（団）】

5　末　自侍御史出　佐沈傳師宣■城幕云々　是亦無再宣城吏　又勝覧十五　寧國府宣城郡名官部【■「州」墨消し、「宣城幕」にすべき】

6　沈傳師嘗為観察使　杜牧為判官云々　是亦無再来之事

7　養按　漁隠叢話後集十五　麗情集云　太和末　杜牧自侍御史出　佐沈傳師宣城幕　雅聞湖州為浙西名部【叢（叢）】

8　風物研好　且多麗色　往游之　時刺史崔君　亦牧之素所厚者　頗諭其意　凡籍之名姓　悉為致之　牧

9　殊不愜所望　史君復候其意　牧曰　頗得張水□　使州人畢觀　俟其雲合　牧當間行寓目　冀此際忽【□「虍*戈」（戯）】

10　有関焉　史君大喜　如其言　至日　兩岸觀者如堵　迨暮　竟無所得　將罷　忽有里姥引髽髻女年十【「関」右傍に「閲」。「有閲」にすべき】【將（将）】

11　餘歳　牧熟視之曰　此真國色也　曰使語其姥　將致舟中　姥女皆懼　牧曰　且不即納　當為後期　吾【曰（因）】

12　十年必為此郡　若不来　乃従所適　因以重幣結之尋黄池二州　皆非意也　洎周墀入相　牧以其素【「尋」「黄」間に挿入符あり、右傍に「拜」。「尋拜黄池二州」にすべき】

13　善　乃併上牋于墀　乞守湖州　大中三年　移授湖州刺史　比至郡　則十四年所約之姝　已従人三載而

14　生二子焉　牧即政之夕　亟使召之　夫母懼其見奪也曰□幼以詣之　牧詰其母曰　曩既許我矣　何為適【□「推+乃」（携）】

15　人　母拜曰　向約十年　不来而後嫁　々嫁已三年矣牧俛首曰　詞也　直強之不祥　乃礼而遣之　曰為恨別詩曰【俛（俯）】

16　自恨尋芳到已遲　往年曾見未開時　如今風擺花狼藉緑葉成陰子滿枝云々　東坡將之湖州戯【「自恨……滿枝」は二八一１に同様に見える】【遲（遅）】

17 贈莘老詩云　亦知謝公到郡久　應怪杜牧尋春遲　□絲只好對禪榻　湖亭不用張水嬉【鬓（鬢）】

18 樵本曰　沈傳師　唐貞元末年挙進士　權德輿門生七十人　推為顔子

19 注云　退之園花云々　漁隱前集十六　唐語林云　退之二侍妾　一曰絳桃　一柳枝　皆能歌舞　初使（ツカウ）［レ］初使王庭湊（ニ）至壽陽【「一」「柳」間に挿入符あり、右傍に「曰」。「一曰柳枝」にすべき】【壽（寿）】

20 驛絶句云　風光欲［レ］動別［レ］長安　春半□-城特-地寒（ニシ）　不［レ］見［二］園花并巷柳［一］　馬頭惟有月團々蓋寄意二姝　逮皈【□「力*辶」（辺）】

21 柳枝踰垣遁去　家人追獲　故鎮州初皈詩云　別来楊柳街頭樹　擺亂春風只欲飛　惟有小園桃李在　留

二七八

1 花不發待郎皈　自是專□絳桃矣【□「宀+竜」（寵）】

2 養按　七言八句　李商隱錦瑟詩季昌增註曰　許彦周詩話云　李商隱錦瑟詩云々　昔令狐楚侍【「養按」右下書き入れ指示あり、「本集」とある。「養按　本集　七言八句」にすべき】【商（商）】

3 人能彈此四曲　詩中四句　蓋狀四曲也　或云　錦瑟　令狐楚妾　天隱註曰　前輩謂商隱情有所屬　託之

4 錦瑟　養謂　適怨清和

5 漲　謝灵運沙賦　注　漲者　沙始起将成■□者也【■「岐」某字墨消し、「将成□」にすべき】【□「山*与」（嶼）】【灵（霊）】

6 叟文類聚後集巻之十七　娼妓部　章臺柳　韓翃　少負［レ］才名　隣-居（ニ）有［二］姓［レ］李者　［一］の（ノ）　毎将（ヒキウ）［二］娼妓柳氏［一］至［レ］其居

7 必邀韓飲　愈熟　柳毎窺所往来　皆名人　回乗暇語李曰　韓秀才甚貧　然所与遊必時賢　是必不■【■「也」某字見せ消し、右傍に「久」。「是必不久」】

8 困　宜假借之　李具酒邀韓至　謂韓曰　公當今名士柳當今名色　々々配名士　不亦可乎　遂命柳与韓　々

9 辞之　柳曰　此豪者　昨暮具言之矣　俄就柳皈　来歳成名　淄青節度使俟希逸奏為従事　以世方【俟（侯）】

10 擾　不敢以柳自随　置■都下三歳不果迓　寄詩曰章臺柳　往日青々今在否　縦使長條似旧垂　也應攀【■某字見せ消、右傍に「之」。「置之都下」にすべき】

11 折他人手　柳荅曰　楊柳枝　芳菲節　可恨年々贈离別　一夜随風忽報秋　縦使君来豈堪折　後為番將【荅（答）】

12　沙吒利所劫　寵之専房　翃随希逸入[レ]覲見[二]柳氏在[二]輜ロ（シヘイノ）中[一]　殆不[レ]勝[レ]情　虞候許俊曰　當為足下致【□「車*并」】

13　之　乃衣[レ]縵-胡佩[レ]双-鞬　従[レ]一騎　造[二]沙吒之第[一]　伺[二]其出[一]　排闥大呼曰　将軍中悪召夫人　僕侍辟易　遂陞堂挾

14　柳氏馳馬而至　時沙吒利□寵殊等　翃惧禍　訴於希逸　希逸以爭聞諸朝　詔柳氏還翃異聞集【□「曰+心」(恩)】

15　章臺柳　韓翃　注　辟字　續翠云　諸侯ノ　公方ヘ申シテ　人ヲ　我カ　属官ニ　スルヲ　云ソ

16　松寺　淵云　昔ハ　鶴ト　名ツイタル　妓女ト　此寺ニ　遊シ処也　臺殿影随月　而高低也

17　村云　月ノ　影モ　臺ノ　高キ　殿ノ　低キ　処ニ随テ　面白　カワル物ヲト　憶昔遊也　或云　月ニ　高低ト　可[レ]点

18　何人――淵云　為字両儀也　一義　誰ト　共ノ　心也　一義　誰カ　為（ニカ）ノ心也　三四句ハ　言ハ　昔ニヒキカエテ　只独遊也■【■「及」某字墨消し、「只独遊也」にすべき】

19　雪ハ溪ニ　積テ　月モ　面白トモ　無曲也　漲ハ何ソ　沙ノ　漲トハ　高也　雪モ　多積テ　高也【溪（溪）】

20　續翠云　為字ハ　サハ　注カ　アル也　補云　為字ハ　十六ノヨミ　アルソ　村云　漲ハ　満也　或云　漲字　著于浮字也　蓋非雪之消

21　□□□□□云　雪漲溪　如刻溪雪也

二七九

1　松寺――續翠云　同[二]一鶴（ノ―ヲ）栖　[一]寺ニテハ禁制ナレトモ　美人ト　同ク　双テ　月ヲ見タシ　モノヲト　思タ　二句妙也

2　宣州開元寺　村云　此開元寺ト云ハ　玄宗ノ　開元中ニ　州／＼守護ニ　云イツケテ　ツクラセラルヽ也日本ノ　安国寺ノ

3　如シ　是ハ　宣州ノ　開元寺也　其国々ノ　開元寺ノ　中ニテモ　名和尚ノ　住持ナント　スル処ハ　名カアルソ　越州（ノ）開元寺ハ　恩

4　断江ノ　住持ニヨツテ　人モ知リタル也　杜牧ハ以前モ　宣州ヘ来ルカ　又後ニモ来ル　此詩ハ　再来ノ時ノ　詩也

5　松寺――村云　此開元寺ハ　松間ニ　アル欤　松ニ鶴ハ　縁語也　此松寺開元寺エ　曾テ　来リシ時ワ　サ

ル　面白キ

6　美人[下]　同ク　宿シテ　アリシ時ハ　夜深ノ　事ナリシニ　月ノ影モ　臺高キ　殿ノ低キ　処ニ　随テ　月ノ影モ　カワリテ　面

7　[白]カリツル　物ヲト　昔遊ヲ　思イ出ス也　例ノ杜牧カ　スイタル事也　昔ハ　如[レ]此コソ　アリシニ今ハ　独リ也　誰

8　カ　今如[レ]昔ノ　我ヲ　ナクサメテ　共ニ　倚[二]東楼柱ニ[一]ソ　ヤラ徒然ヤ　昔シ遊シ時ハ　臺殿月高低ナツシカ　今ハ　正是ハ　即今也

9　是千山雪漲溪マテ也

10　村云　一二之句　記昔遊　三四之句　叙[二]今夕[一]　点ハ　為タメニ倚トヨミテ　心ハ　為トモニ倚也　直作[二]共字之訓[一]　不可也　正是ハ　即今也

11　□□何　人ノ共ト倚ニカ東楼　独愁之時ハ　山モ　溪モ　雪フル　正當之時也

12　東楼ハ　村云　増注ハ　東楼ハ　宣州ノ　政所ノ東ノ方ニ　アルト　遠ク　云イ　ナセトモ　其レハ　アマリニ　遠キ也　非也　只開元寺ノ　中ニ　東ノ

13　方ニ　アル楼マテ也　又州治ハ　政所也　此牧詩ヲ慕テ　後ハシ　州治ノ　東辺ニ　楼ヲ　建テヽ　東楼ト名ツクル欤【「所」「也」間に挿入符あり、右傍に「之叟」。「政所之叟也」にすべき】

14　藤隠瑣細　杜牧云々　松寺曾同一鶴栖　盖其再至之時　憶昔日同栖之偶儷而作也　日夜深云々　亦是形容當初

15　游観之時叟也　曰何人云々　以言只今誰人為我同倚東楼之柱　亦恋昔之偶儷之謂也　曰正是云々　以言只今独

16　自倚柱　望見千山雪霽之景　正似當時深夜同在臺殿之上　共観名月之光　与彼溪漲白浪之色　相為

17　高低之景也　以鶴比婦人　而言唐人多以婦人　託名於物　如李商隠錦瑟　韓翃章臺柳　是也　牧之

18　集[以]　有題寺楼云　暮景千山雪　春寒百尺楼　[独]登還独下　誰會我悠々【楼（樓）】【独（獨）】

19　和云　[陰々古]殿嶺雲栖　鴈塔侵天樹影低　幽鳥数声山色晩　寒泉載月過前溪【鴈（雁）】【「和云」は二八〇4に同様に見える】

20　雪樵曰本　松寺云々二句言　杜牧再至宣州　重游開元寺　則曾宿之妓　今無■之　而月影依旧与臺殿倶高低

【「曰」「本」間に挿入符あり、「本」右傍に顛倒符ある。「雪樵本曰」にすべき】【■某字墨消し、左傍にヒ、右傍に「有」あり、「今無有之」にすべき】

21　耳　於月之初出寺　則或云　近水楼臺先得月　向陽花木易逢春　或云　前峰月照半江水　僧在翠

二八〇

1　微開竹房　至夜深　則或云　月傍九霄多　或云　庭空月色多

2　樵本曰　何人云々二句言　今夜何人与我共倚東楼柱蓋昔所見之月　可以喜　今所見之雪　堪以悲也　雪漲

3　字　雖雪消水長之景　俱属于雪　則可也

4　和云　陰々古殿嶺雲栖　鴈塔侵天樹影低　幽鳥数声山色晩　寒泉載月過前溪　子安【「和云」は二七九 18 に同様に見える】

5　山行　遠上――補云　慈氏　先読第二句　而後読第一句　不可也　続翠云　遠上――是ハ　不上山之詩也　有（アルラン）［二］人家［一］【この行まで数行間杜牧「山行」詩原典テキストが置かれている】

6　是ホト　面白　山ヘノホライテト　思タ　コヽテ見タダニモ　面白シ　マシテ　山上ワ　サソアルラン言小人カ　朝廷ニ　アリテ

7　我等ヲ　ヨセヌ　只今霜下ヲハ　葉皆可落也　霜葉ハ　小人也　二月花ハ　君子也　山ハ■君ノ■象也【■■某字墨消し。「山ハ君ノ象也」にすべき】

8　淵云　欲［レ］上［二］寒山［一］　則下　有（ニ）［二］石径［一］之説　不［レ］可也　已命［レ］題以［二］山行［一］　豈有［二］其理［一］哉　一二句言　山行之景色　為愛楓葉

9　無［レ］故停車也　杜北径詩　前　登（スヽンテ）（テ）［二］寒山（ノ）重（ナレルニ）［一］　屢（シバ）　得（タリ）［二］飲馬窟（ノヲ）［一］　停車　後鄧禹傳　養按　本傳无注　後列第六【「径」見せ消、右傍に「征」。「北征詩」にすべき】

10　村云　坐字　不企之意也　続翠義　無用乎　只言触目景耳　補云　此詩言　山険難　而不［レ］乗［レ］車也能［レ］【「不」「乗」間に挿入符あり、「能」右傍に顛倒符ある。「而不［レ］能乗［レ］車也」にすべき】

11　山谷　茶詩　煎成車声■羊腸　文選　魏武　苦寒行曰　羊腸阪詰曲　車輪爲之推　注引呂氏春秋【■某字見せ消、右傍に「繞」。「繞羊腸」にすべき】

12　九山曰太行羊腸其山盤紆　如羊腸　白雲生――白雲生処　必有人家乎　不能上山シテ　停車

13　イタ処ニ　不思[二]　□[一]　楓アルホトニ　賞之也
ワサト　楓ヲ　諒可[レ]見トテハ　不来也　此義可也
村義如此
14　□□□字坐　子　可著眼　欲登寒山以尋仙境　則只
有一村人家耳　不如停車于此　坐愛看楓林之紅也

二八一
1　杜牧□□因作恨別詩云　自恨尋芳到已遲　往年曾見
未開時　如今風擺花狼藉　緑葉成陰子滿枝　此詩【二七七
16に同様の詩が見える】
2　同時作也　停車――言坐愛所約之女也　已雖抱二雛
猶美於未開花之時也　此詩若為恨別詩二首之一　則
3　有此義乎　雖然　以山行為題　豈有其理哉　此説不
足取焉　或云　欲上山而未上之説　依（ヨルカ）[二]停[レ]車
[一]字　乎（ニ）　大山険
4　者　難[レ]乗[レ]車　小-山（ノ）平者　可[レ]乗[レ]車
小山　鹿苑寺舩岡山　乃可[レ]乗[レ]車者也　然-則　乗
[レ]車上[二]寒山[一]　穿[二]石逕[一]　愛【舩（船）】
5　丹楓於白□生処之説　有何害哉　石逕斜（ナルラン）
有（ラン）人家之点　不可也　遠上（レハ）[二]――（ニ）[一]石徑
斜（ナリ）之点　可也【□「白+云」（雲）】
6　一句曰寒山　四句曰霜葉　恰好也　遠ク上ト　云ホ
トニ　石徑斜ナリト　云ソ　或云　蒲室疏云　棧道九折
而車行不[レ]停云々【葉（葉）】
7　此篇或云　杜述不遇　遠上――言官途艱難　不得進
也　白雲――仰望皇居也　停車――言欲達身於官
8　位而不得　猶如霜葉已老也　雖然　其文釈如花也
若用　則才華未衰也
9　黙雲云　曾見錢舜挙□抽此詩中景也　白雲処有人
家　々々々下有楓林　詩人停車於山下　隔溪愛楓葉也
【「雲」「処」間に挿入符あり、右傍に「生」。「白雲生
処」にすべき】【錢（銭）】【□「尺+日」（畫・画）】
10　坐　文選　陸士衡　長歌行曰　体澤坐（ソヽロニ）　自捐（スツ）　善注
無故自捐　曰坐也　済曰　体澤（ハ）身之光澤（ナリ）　捐（ハ）弄
也　或云　坐字　猶言聊尓欤
11　遠上寒山――村義　言ハ　山ヘ　遠々登ントスレハ
石高ナル　徑テ　悪シ　人家ハ　結句峯頂ノ　白雲生ス
ルノ　処ノ　絶頂ニ　アル也

12　石徑ノ難路ヲ　凌テ　登ンモ　大義也　縦イ上リテ
看タリトモ　只白雲――マテ也　サシタル事ハ　アルマ
イト　思テ　山下ニ
13　停車レハ　偶然トシテ　楓林ノ面白ヲ　看ツケテ
アル也　我ハ　山ヘ　登ラントテコソ　此ヘハ　来レ
更ニ　此楓ヲ　愛セン為ニ
14　ハ　不来カ　不図　此面白キ　楓ヲ　看ツクル也
近比　看事哉　面白ヤト　思テ　愛見レハ　二月三月ノ
花ヨリモ　猶霜【「近比」、比（頃）】
15　葉ハ　ウツクシク　見事也　坐スルト　云字ハ　偶
然ノ　心也　何トナウ　停車レハ　面白キ　楓林アル
也　又執イノ　心ハ　養謂
16　執イ　恐ハ　失位乎　世間正体ナル　物ハ　ソハニ
成テ　横出カ　□権柄也　君子ハ　ソハヘ　成テ　小人
カ　花ヲ　ヤル也　又説ハ　此詩ハ　杜【□「扌＊丸」（執）】
17　牧カ　湖州テノ　詩也　以前　小女ニ　約シテ　後
ニ　湖州ヘ　来レハ　ハヤ　所［レ］約スル女ハ　人ニ
嫁シテ　子ヲ　二三人持テ　年モ　深レト
18　モ　今時ノ　十七八ノ　小女ナントヽ云ヨリハ　面
白キ　処アル也　其事ヲモ　云也　是ハ　居呂仁カ　評
也【「ハ」「居」間に挿入符あり、「呂」右傍に転倒符あ
る。「是ハ　呂居仁カ　評也」にすべき】
19　樵本曰　某　呂居仁詩部庫評曰　此詩三四句謂　曾
所約小女　雖有二雛　猶容色新　云々　詩釈皆不及之
20　天英亦然　蓋近詩穿鑿乎
21　樵本曰　遠上云々二句言　石径縈廻　擡頭見上　則
白雲生処有山店也　天英解以坡詩　寺岩底千万仞　路
【「寺」「岩」間に挿入符あり、右傍に「藏」。「寺藏岩
底」にすべき】

二八二

1　轉山腰三百曲　蓋上下雖異　具所見同也　然以第二
之句　為将上寒山之先攸覩之景也　停車云々【轉（転）】
【覩（睹）】
2　三句言　霜葉勝花　故停車至于晩也
3　和云　石桟崎嶇澗路斜　隔林茅屋是山家　溪辺稚子
騎黄犢　流水潺々樹落花　子安
4　寄山僧　或云　這僧浄土宗也　此蒿當［二］山僧［一］
而作　皈題格也【この行まで数行間張喬「寄山僧」詩原典
テキストが置かれている】
5　才子傳第十　張喬隠居九華山　池州人也　有高致
十年不窺園以苦学　詩句清雅　迥少其倫　當時東南
6　多才子　如許棠　喩垣之　劇燕　呉罕　任濤　周繇
張蠙　鄭谷　李栖与喬　亦称十哲　倶以韻律馳声【「栖」
「与」間に挿入符、右傍に「遠」。「李栖遠与喬」にすべ

き】

7 鄭谷 雲臺編 久不得張喬消息云 天末去程孤 ■沿淮復向呉 乱离何処甚 安穏到家無 樹尽雲离【■「浴」某字墨消し、「沿淮復向呉」にすべき】

8 野 檣稀月滿湖 云々

二八三

1 大道――續翠云 本来大道ハ 市モ 山モ 俗モ真モ 狸奴白牯ニモ 染マイ者 ナニトテ 白雲ト共ニ相約シテ イタソ 学 蓮者

2 刻漏欤 其遠公ハ 見解低(ヒクイ) 者也 俗ヨリ 云タカ 面白ソ

3 渊云 權大乗ハ 法相宗 三論宗也 實大乗ハ 天台宗 華厳宗 真言宗也 大道本無佛 有何■ 本無衆【■「梧」字見せ消、右傍に「悟」。「有何悟」にすべき】

4 生 有何迷 黄蘗殺母 丹霞焼佛 是教外大道也然則 居市亦得 居山亦得 何与白雲心期哉 白雲【教(教)】

5 得(エン)――雲ハ ナニカ 人ト 期ヲ 結心ハ アラウスソ 遠公ハ 殊勝ナレトモ 愚痴也 浄土宗小乗也道在[二]行住坐卧【「得」字左傍に「ウル」】【卧(臥)】

6 之処(ニ)[一] 何少礼賛哉 此僧似遠公也 或点 那得(ン)[二]有-心(ヲモテ) 期(スルコトヲ)[一] 幻謂 不可也

7 村講云 分[二]朝-市山-林(ヲ)[一] 則有[二]所染[一]也 此(ノ)僧 無-心与無[レ]雲同 何必帰[レ]山哉此僧向-上(ニ) 進[レ]歩(ヲ)也 昔遠公刻[二]蓮【「無-心」右傍に「无[二]心に期[一]ソ」】【「同」「何」間に挿入符、右傍に「也」。「同也」にすべき】

8 漏[一] 礼[二]六時[一]者 可[レ]謂有[二]所染[一]也 言僧優[二]於遠公[一]遠矣

9 聽雨義 那字 有[二]抑下之意[一] 這僧皈山者小乗禅也 為可咲焉

10 桃云 大道―― 一箇無心閑道人 有時孤峯頂上盤結草菴 有時十字街頭 灰頭土面 大恵云 住徑山

11 一千七百衆囲繞 亦只如是 編管在衡州 亦只如是也 然_則 何_必与白雲相_期哉 三四句与渊義同 遠公

12 逢仏□那舎尊者ヲ カシイ 問荅ヲシテ 恥ヲ カイタソ 一義 一二句 美[三]山-僧(ノ) 到(コトヲ)[二]無-心-

地[一]　三四句美[二]有[レ]脩有[レ]　證【□「馬*犬」（駄）】

13　蓋山僧徳似遠公也　此義不可也

14　補云　此詩有三義也　一義云　一二句言此僧無心三四句言此僧雖[レ]到[二]無心地[一]　猶被小乗縛也猶字　抑下之意

15　也　東坡贈道潜詩　猶嫌剃髪有（ルコトヲ）[二]詩-斑[一]之意也　言已無心　則何必隔朝市山林也　已喜禅-心無[二]

16　別（ノコト）語　尚嫌剃髪有（ルコトヲ）[二]詩斑[一]　詩斑トハ　為（メニ）[二]作[レ]詩苦（ノ）[一]　而髪-白也　道潜本為[二]禅者[一]　故知（テ）[二]逢（リ）必別（ノ）-初タルノ

17　理[一]　而無[二]惜[レ]別之語[一]　是尤可喜也然（レトモ）　彼為[レ]吟[レ]詩而髪-白者　我（カ）所[レ]嫌也

坡集十九与道潜留別之詩也【「彼」右傍に某字ある】【「我」右上に「坡」。「我」は「坡」即ち東坡を指す意か】

18　一義　聴雨云　此僧高於遠公也　吾美此僧　抑遠公裏比此僧於遠公也　一義一二句　凡言[二]無心高僧[一]也　不[レ]指[二]【「凡」右上に「捻論」とある】

19　此僧也　三四句始言此僧也　蓋抑之也　幻謂　此義可欠

20　養按　玉海巻第十一　漏刻部　引李肇國史補云　越僧灵澈取銅葉製器　為蓮花漏　置盆水之上

21　底孔漏水半之　則沈　毎昼夜十二沈　為行道之節

二八四

1　坡詩　病貪贈茗浮銅葉　□注　以銅造葉　状以為茶盞

2　大道――趙曰　皈題格　主那得心期　第一句言　大道本来不分朝市山林　二句言　雲出无心　何与

3　僧期哉　三句言　山僧向上進歩　如遠公未离修行地大道在聖不増　在凡不減　不有不食　不去不住【減（滅）】

4　不関語言　不随方圓　无由認蹤跡　那肯受染汚　朝市ト山林ト　无[二]分別[一]　如雲无心也　山僧ハ　与【蹤（踪）】

5　[レ]雲斉也　■■如[三]雲无[一]心期[一]也　遠公ハ　愚痴々々トシタル　者也　念佛申シテ　ヲルハ　ソクハクノ　所染也　未离修行地者【■■「心田」某二字墨消し、「如[三]雲无[一]心期[一]也」にすべき】

6　也　心田云　一篇皆山僧ノ叟ソト　那字ハ　ヘサヘタ　雲ハ　トコニ　有[二]心期[一]ソ　此僧　山エ　皈

テ　念仏申スハ　所染ソ　独ノ

7　字与那ハ　ヘサエ字也

8　或云　九華僧也　隔城市　招不来　故有此詩　即華山作也

9　大道――村義　此詩ハ　チツト　法門ヲ　云也　寄[レ]僧ニ　ホトニ　カウ云ソ　此吾大道ト　云モノハ元来全ク　不[レ]住[二]著於物[一]

10　无心无念ナル也　如[レ]其山中ノ　白雲モ　トコニ有[二]心期[一]　アソコニハ　居ス　コヽニハ　居マイト　定テ　一処ニ　住著シ　物ニ　染マル

11　叟ハ无ソ　白雲亦猶如大道也　是レハ　山僧ノ　向上ノ　田地也　昔遠公ハ　独リ　区々トシテ　刻[レ]蓮漏を[一]　昼夜六

12　時　念仏マウシテ　脩行スル也　是マコトニ　小乗之相也

13　樵本曰　査云　大道云々　言触物随分　而有染有浄未至于大道　在酒肆嬈房　而無所染　即是真大道也　文

14　殊　三処度夏之類　是也　所謂無所染者　那与白雲有心期哉　遠公刻漏　礼六時　是有所染者　甚可陋也

15　樵本曰　恵遠所礼　与六時礼讃　異也　晨朝者　隋彦　増製之　其讃云　法藏因弥遠　極楽果□深　異【□「不*、ム」（還）】

16　珎參作地　衆宝間時　為林華開希有色波　揚實相音何當無受乎　一遂往生心　又白日中之讃　唐

17　善道悉製之　日中者　拠観経文　日没者　拠大経文十二光佛　初夜　拠天親浄土論　中夜　拠龍樹十二礼后夜　又拠大経

18　樵本曰　恵遠　鴈門賈氏　少為儒生　博極群書　常与弟恵持造安師■下　聞出世間法　而悅之　歎曰【「安」「師」間に挿入符、右傍に「法」。■「度」某字見せ消、右傍に「席」。「法師席下」にすべき】【悅（悦）】【歎（嘆）】

19　九流特粃糠耳云々　明教恵遠影記曰　大塊噫氣　六合清氣　遠公之名聞也　四海秋色神山中　聳遠

20　公之清高也　人龍僧鳳　長揖巣許遠公風軌也　白雲丹壑玉樹瑶草　遠公栖處也【巣（巣）】

21　佛祖統紀二十七　善導　不知何処人也　唐太宗正観中西河綽禅師　九品道場　講誦観経　大喜曰　此真入【「中」「西」間に「見」。「正観中見西河綽禅師」】

二八五

1　佛之精要　修餘行業　迂僻難成　長安道族　傳授浄土法門者　不可勝数　従其化者　至有誦弥陀経十万至十【「十万至十」は「十万至五十万」にすべきか】

2　万巻　云々　念佛日課万声　至十声　云々　後忽謂

人曰　此身可厭　吾將西皈　乃登柳樹向西願曰　願佛接
我　菩【「十声」は「十万声」にすべきか】
3　薩助我　令我失正念　得身安養　言已投身自絶　高
宗知其念佛出光明　舍身精至　賜号子曰光明【「令我失正
念」は「令我不失正念」にすべきか】
4　樵本曰　慈雲浄土畧略傳　阿弥陀佛化身　至長安聞
滻水声曰　可教念佛　三年滿　長安城皆念佛　後有法照
師　即善導和上也【畧（略）】
5　樵本曰　又瑞應傳云　善導姓朱　泗州人也　云々
至綽禅師所問曰　念佛實得往生否　師荅曰　若辨一蓮花
行道
6　七日不萎者　即得往生云々　寫弥陀経十卷十万卷
画浄土変相三百鋪　所見塔廟　無不修葺　佛法東行【寫
（写）】
7　未有禅師之盛矣　樵本曰　又統紀二十八　曇□初為
術孝　就陶隱居得仙経　還洛下　遇菩提流支　問曰【□
「亦+鳥」（鸞）】【孝（学）】
8　佛道有長生乎　支咲曰　長生不死　吾佛道也　即授
以観経曰　能解此　則三界無復生　六道無復轉　師承
9　其語　遂焚毀仙経　昼夜専誦観経　修三福業　観想
九品　北魏主嘉之號神鸞　敕住汾州玄中寺
10　一夕正持誦　見梵僧入室　謂曰　吾龍樹也　以汝有
浄土之念　故来見汝　鸞曰　何以教我　僧曰　已去不可
及　未来
11　不可追　見在今何在　白駒難与回　言訖不見　鸞即
令弟子同音唱佛　西向瞑目而化
12　樵本曰　道綽　入壁谷玄中寺　曇鸞之旧居也　専志
念佛　日以七万徧為度　勧并汾人　念佛　或以豆記所度
13　者　及萬解　四月八日集道　俗為如来生朝慶會　俄
見鸞空中乗七宝舩　謂綽曰　汝浄土堂宇　已成　衆復見
14　化佛菩薩　飄々在空　皆忻仰歎異　同志道撫者　毎
相見　必指浄土為會　綽亡三日　撫聞之曰　吾常期先
15　行　今乃在後　吾加一息之功　見佛可追矣　即於像
前　叩頭陳露　退就其座而化
16　樵本曰　愚案　蓮社有十八賢　此外百二十三人　其
可見者　三十七人　陸修静其一也　陶潜　謝灵運　范甯
不入■【■某字墨消し。「不入社賢也」にすべき】
17　社賢也
18　雪樵本曰　又法照号后善導四月六日　至五臺山佛光
寺見石門　青衣二童子　歳可九歳　一名善財　一名難
19　陀　相■引入門　行北五里　見一金門　号大聖竹林
之寺　方圓廿里　内有一百二十院　法照拝見文殊普【■
某字墨消し、「相引入門」にすべき】【聖（聖）】
20　賢坐師子座　左右有萬二千菩薩　文殊對法照勧念佛
三昧之門云々　是唐代宗大暦五年　當本
21　朝平城宝亀十一年　佛滅後一千七百十七年也

二八六

1 樵本曰 案観経佛告阿難及韋提希 上品上生者 若有衆生 願生彼國者 發三種心 即便往生 何等 為

2 □者 至誠 二者深心 三者回向發願心 具三心者必生彼國 復有三種衆生 當得往生 何等為三 一者

【「誠」「二」間に挿入符、右傍に「心」。「至誠心」にすべき】

3 慈心不煞 具諸戒行 二者讀誦大乘方等経典 三者修行六念 回向發願生彼國 具此功徳 一日

4 乃至七日 即得往生 々々彼國

5 樵本曰 六学僧傳十一 晋慧遠生賈氏鴈門楼煩人也龍章鳳姿 照■魚鳥 見正山 愛之□於山陰【■某字見せ消、右傍に「映」。「照映魚鳥」にすべき】【□「广*戸」（廬）】

6 以杖卓地曰 有泉當住 泉忽湧 曰定居焉 常誦経

泉上 有龍出聴 曰号龍泉寺 謝灵運恃

7 才氣出人上 見遠悠然意消遠 卜居三十年 影不出

山 迹不入俗 毎送客遊 履以虎溪為限云々

8 樵本曰 有寄人二首 此後篇云 別夢依々到謝家

小廊廻合曲欄斜 多情只有春庭月 猶為離人照【夢（夢）】

【廻（廻）】

9 落花

10 雪樵本曰 大道——云々二句言 大道之体 風吹不入 水洒不着 本来清浄 不愛一塵 所以道 入林不動草 入水不

11 動波 然則豈与白雲有心期哉 慧てる禅師云 白雲児灵々自照 青山父卓々常存 并案則可也

12 遠公云々 二句言 人道本如此 然遠公深入念佛三昧 足不踏紅塵 影無出青山 以礼六時 可咲乎 蓋指山

13 僧 比遠公也

14 和云 黙坐痴聾十載餘 他生悟徹此生期 楊枝嚼罷岩前立 看到雲皈月上時 子安

二八七

1 寄人 履歴 才子傳無傳 遺響 侹作泌 玉篇 泌歩必切 又音秘 遺響有此詩 張泌寄人二首之一也 其

2 一首云 別夢依々到謝家 小廊回合曲欄斜 多情只有春庭月 猶為離人照花 雪本同【「照」「花」間に挿入符あり、右傍に「落」。「照落花」にすべき】

3 酷憐——續翠云 酷憐 [一]——[一]為[一]多情 [一] 言ハ 風月ノ 面白キ テハナシ 人ヲ思ホトニ 一夜不[レ]睡ソ 嘯タソ ヨニヨウ 忘タレハ 春ハ

4　陽氣カ　發生スルホトニ　夢カナンソニ　双[二]連理枕[一]　分合歓被トカ　ミタホトニ　又カ　思カ　生シタ　毎句已忘タレハ　夢ニ　見テ　思イ

5　出シタト　作ル也　春夢不真ホトニ　愈倍惆悵也惆悵痛皃　又悲哀皃　惆悵モ　タユルコトカ　出キタソ唐世話也

6　淵云　独居時ハ　風月シ　不面白　与人約　則殊更面白也　憐ハ　愛也　因多情而風月面白　去年今時分相別ホトニ　思出シテ

7　カナシイソ

8　村点　酷憐[二]風月[ヲ][一]為[二]多情[ノ][一]　美人ニソウテイル　時コソ　多情にテ　風月ハ　面白ケレ　春ニナリ　タレハ　ナニト　ヤラシテ　ムスト　別离スルホトニ　恨深也

9　平時風月之時　我因風月思君　君亦回風月思我者也今一別不相逢云々　憐者憐人多情也　尋思者　尋思夢中所見之事也

10　補云　去年相約者　為喜　今春相別者　為憂也　我心喜　則風月亦如喜　我心憂　則風月亦如憂也　猶言我多情　則

11　風月亦多情也　倚柱憶着旧遊　則如春夢不分明也

12　村講　一之句与淵意同　三四句与補同也　言ハ　与此人相逢タシ叟ヲ　尋思ヘハ　夢カ　ウツヽ欤

13　村又云　一二之句ハ　思君多情　故愛風月　今春又別　其恨尤深　或云　尋思佳人　則猶惆悵也　欲夢見之則夢亦

14　不分明也　酷憐　桃云　風月[ヲ]　愛スルホトニ　風月為[ノタメニ]　多情カ　生スルソ　酷憐て[レ]風月為[タメニ]_多情ノ点也　還字　雖春有恨之義

15　酷憐[コトハ][二]風月[ヲ][一]風月為[タメニ][二]多情[ノ][一]

村義言ハ　此間モ　愛[シテ][二]風月[ヲ][一]　花ノト云モヲノレ　一人ニ　多情ニシテ　情ノ　切ナルニ　因テ也ヲノレニ　ソウテ

16　イル時コソ　風月モ　面白ケレ　春ニ　成レハ　何トシタル　ヤラウ　ムスト　別離スルホトニ　恨无[二]是非[一]也　サルホトニ　餘ノ　悲シサノ　アマ

17　リニ　倚[テ][レ]柱　物思イ　スカタニテ　弥悲哀ナルマテ也　此ノホトノ　會合　只一宵ノ春□カ　ヤレ□欤　ウツヽ欤　ヤレ　不分【□□「已+夕」（夢）】

18　明也　捻シテ　春夢ヲハ　淡キ　物ニスル也　朦□

ト アル物也　桃云　尋思シテハ　尋求伺察シテ　ホリ入テ　物ヲ　思タ　ナリソ【「朦□」、□「月*竜」（朧）】

19 カウ思フホトニ　倍ス／＼　惆悵スルソ　人ヲ　思ニ　ツケテハ　思ツヽクルホトニ　イタラヌ　処モ　ナウ　思モノソ　惆悵ハ　痛恨ノ皃也　サラハ

20 セメテ　夢ニ　ナリトモ　見テ　逢ハヤト　思ヘハチヤト　夢ミレハ　春夜ノ　短カキニ　一場　ソツト見レハ　サタカニモ　ナイソ　夢タニモ

21 サタカニモ　ナイホトニ　倍惆悵スルコソ　道理ヨソ

二八八

1 雪本　酷憐――全篇言　去年之春送別　故今年之春亦風月使我生別恨　何其多情思哉　分明欲夢其人　則春

2 夢不分明　故倍惆悵也　槎住　蓋云之　天英亦同之

3 雪本曰　和云　春風秋色許多情　月淡花殘愁自生誰念西窓題句客　青灯耿々候天明　子安

已前共八首

桃云　第一二句　凡に言之　不[三]直に指[二]其事[一]　到[二]第三句[一]　帰して[レ]題に切近に也　直に指[二]其叟[一]　而出第四句者也　或曰　第三句用[二]器用字[一]　句面同也　或云　三四句　有態藝字　不足一咲　渊云　第三句　思出于千里【藝（芸）】之外　而言人之不意之事也　第四句不待第三句之喚　而述其情也　或云　三句作人叟者也　天隱

所謂景物中有人者也

刘禹錫憶楽天詩　尋常相見意殷勤　別後相思夢更頻　毎遭登臨好風月　羨他天性少情人

〈表1〉先に異体の文字を置き、その後の（　）の内に通行体を入れる。

醫（医）	曰（因）	韵（韻）	悅（悦）	烟（煙）	
渊（淵）	往（往）	華（華）	卧（臥）	會（会）	
盖（蓋）	廻（廻）	畫（画）	閤（閣）	孝（学）	
鴈（雁）	竒（奇）	氣（気）	亰（京）	况（況）	
敎（教）	侭（儘）	藝（芸）	溪（渓）	減（減）	
權（権）	鼓（鼓）	俟（侯）	號（号）	國（国）	
昏（昏）	參（参）	殘（残）	尓（爾）	峀（時）	
辭（辞）	實（実）	劦（州）	脩（修）	壽（寿）	
從（従）	嘗（嘗）	商（商）	珎（珍）	寫（写）	
翆（翠）	粹（粋）	垩（聖）	莭（節）	迁（遷）	
舩（船）	蹤（踪）	巢（巣）	桒（桑）	薮（叢）	

藏（蔵）　續（続）　捻（総）　臺（台）　但（但）
歎（嘆）　團（団）　遲（遅）　傳（伝）　轉（転）
覩（睹）　荅（答）　當（当）　黨（党）　獨（独）
讀（読）　慱（博）　發（発）　廢（廃）　范（範）
廏（廟）　鬚（鬢）　冨（富）　俛（俯）　并（並）
篇（篇）　峯（峰）　皃（貌）　滿（満）　无（無）
夢（夢）　餘（余）　欤（歟）　葉（葉）　來（来）
离（離）　刘（劉）　柳（柳）　凉（涼）　两（両）
灵（霊）　楼（樓）　廿（二十）
亘・宜（宜）　爭・叀（事）　從（縦）　横　近比（頃）

〈表2〉行末の【　】中において、「米*凵」（幽）や「「旡+舛」（舞）のように記す異体の文字の、その通行体すなわち（　）内の文字「幽」や「舞」を一覧した。

*印の類：椏　解　還　譏　戯　時　執　駄　對　聞
辺　嶼　朧　幽　廬　臚
+印の類：愛　雲　恩　画　挙　携　尓　受　食　職
声　寵　定　桃　等　番　舞　夢　雖
*印と+印の組み合わせた類：講　綛

〈表3〉表2のように工夫しても再現できなかった異体の文字の、その通行体を一覧した。ただ、操作困難なため、少数ユニコードには文字がないものも割愛した。

韻　縈　隠　穏　焉　回　槐　懐　害　隔　巻　閑
還　機　就　挙　興　形　経　構　講　再　此　施
実　者　醜　初　床　召　将　承　賞　寝　図　衰
雖　聖　説　楚　疏　第　段　竹　土　置　對　廷
彤　晩　微　暮　翻　免　用　覧　流　留　龍　旅
麗　聯　路

〈付記〉本稿は2016年度中華人民共和国国家社会科学基金項目資助（日本内閣文庫蔵室町時代抄物写本『三体紙幻雲抄』与唐宋詩的輯佚、校勘研究／項目号16BZW062）を得たものであり、その研究成果の一部とする。特記して感謝を申し上げる。

（リュウ・レイ／北京師範大学外国語言文学学院　教授）
（二〇二一年九月十七日受理）